障害者問題を社会へ広く位置づける芸術
——障害の社会モデルの実践として

平成 27 年度
東京工芸大学大学院芸術学研究科
メディアアート専攻
清野 智子

著者は、「芸術とは社会変革である」という芸術概念を持つ芸術家として、また知的障害者の伯母を持つ一人の人間として、2001 年から約 15 年間に渡り、健常者の価値観で構成された偏った社会規範や障害定義をパラダイム・シフトへ導くための芸術活動を実践し、本論において、障害者問題を社会へ広く位置づけるための具体的な芸術表現とそれを担う芸術家のあり方を示した。

今日、日本の芸術需要は物質主義に著しく偏り、芸術による社会問題喚起へのニーズが低い。また、障害者問題は差別の歴史と共に変遷し、現社会には依然として「障害の医学モデル」からの障害定義や概念が根強く浸透している。今日の差別形態は、いわゆるあからさまな差別ではなく、差別する側・される側に差別の自覚がない「善」の顔をした「不可視化された差別」が多くを占める。さらに、今日の社会構造や文化、人間の本能により形成される差別動機を拭い去ることは困難を極める。

本研究は、独特の文化的背景を持つ日本の現社会へ向け、芸術の新たな社会的価値や可能性を提起する芸術的側面と、芸術の独自性と有利性により、障害者に無関心な人・差別的な人へ障害者問題を喚起する社会的側面の 2 つの目的を持つ。

これまで、障害者差別に関する取り組みは、法の整備・教育制度の見直し・福祉政策などにより講じられて来た。しかし、差別抑制に関する法律は、既に社会へ顕在化された差別に対する後手の対処法である。また、今日の障害者理解教育は、形式的な体験に留まり、差別する心を問い直すまでに至っていない。さらに、長年の隔離政策や、専門家による福祉政策は、健常者から障害者との接触機会を奪い、両者の二極化を生む悪循環を招いている。

今日、社会に認知されている「障害者と芸術」の関係性には、障害者による芸術活動と、障害者週間などに代表される公共機関による意識啓発・啓蒙を目的とする芸術利用が存在する。障害者による芸術活動は、福祉的役割を脱しておらず、そもそも障害者問題の可視

化に目的を持っていない。さらに、障害者による芸術作品を商品として扱う支援のあり方は、障害者差別を顕在化させた資本主義経済に従属する「物質主義型芸術」への賛助である。また、公共機関による芸術利用は、健常者の自己弁護と自己防衛のための都合の良いプロパガンダであり、現社会の「差別イデオロギー」の正当性を主張しているに過ぎない。

昨今の悪化する社会情勢により、これまでの社会規範に疑いを持ち始めた人々の間において、社会と芸術の関係性をめぐる問い直しに関心が高まっている。ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイスが提唱した「拡大された芸術概念」や、芸術の主題に社会問題を採用したソーシャル・アートには、人間と社会のより良い関係形成を再考するための「芸術の社会的効能」が内在化している。

障害者問題を社会へ広く位置づける芸術は、現社会における不可視化された障害者差別や障害当事者の抱えるジレンマを、多くの人々と共有・再考し、社会を変革に導く目的において、「障害の社会モデル」の立場に立ち、具体的な障害者問題を率先的にデモンストレーションする役割を担う。そして、その内在的主題には、不可視化された差別を可視化するため・障害当事者の生きづらさを代弁するため・人類の根源的な問題に対する問い直しを図るための「芸術の社会的効能」を有する。また、この芸術は、これまでの差別政策とは一線を画し、差別が社会に顕在化される前に、障害者に無関心・差別的な人々の内的偏見抑制動機に揺さぶりをかけ、受動的に障害者問題に触れ、能動的にその内在的主題について思考を巡らす機会を与える唯一の独立的有利性を持つ「自己覚知政策」として、「美」的な社会を形成する「マクロ的障害者問題改革」なのである。

障害者問題を社会へ広く位置づける芸術家は、障害当事者と社会に対する責任能力と、芸術家としてのあり方が試されている。芸術家は、より純粋で効果的な社会変革を遂行するために、既存の価値観に縛られることなく、己の尊厳を尊重し、管制塔から社会へ極めて冷静な眼差しを向け、健常者側との距離が近い社会を全ての人間の中心に置く任務に全力を尽くさなければならない。

今日の社会状況を考慮すれば、「現社会における芸術需要の偏り」・「一般社会へ浸透する障害定義」両者のパラダイム・シフトには長期戦を覚悟するしかない。しかし、障害者問題を社会へ広く位置づける芸術は、社会を変革に導く「障害の社会モデルの実践」として、確固たる芸術の力を有する。本論を、障害者問題を社会へ広く位置づける芸術とその芸術家のあり方を方向付ける一つの礎と位置づけ、この問題を担う多くの芸術家の出現を期待すると同時に、一人でも多くの人が無意識に差別する心を覚知し、社会的排除を感じている全ての人々の問題を自分自身の問題として再考する日が訪れることを強く望む。